



内周外周



川崎ゆきお

日常というのは自分の内周の中にいる。そこは安定しており、居心地がいい。その限りにおいて、この内周からは出たくないだろう。求めるものが、既にそこにあるのなら。

「内周ですか」

「はい、始発駅と終点が同じ路線のようなものですよ。それら内周の駅から外側に向かう路線もありますがね、まあ、滅多に乗らなかったりする。用事があれば別ですが」

「内周というのは内風呂のようなものですか」

「そうですね、我が家に檜の湯船があるのなら、銭湯には行きませんよ。まあ最近風呂のない家の方が珍しかったりしますから、外湯というのは少ないです。温泉なら別ですがね」

「私も最近内周暮らしですよ。外周に出たいとは思うのですがね。出たら出たなりに楽しいのですが、近場でも似たようなものがありますから」

「でも距離感が違うでしょ。遠くまで来たなあと言う感慨が加わる。これがそもそも違うのですよ。だから、つまらん場所でも、遠いだけで十分楽しめますよ。なぜなら、もう二度と来ることがないかもしれませんからねえ。内周の近場ですと、明日また行けるでしょ」

「そうですねえ、ところで木村さん、あなたは外周へ最近飛び出しましたか？」

「はい、私は内周より外周の方が得意です。だから、逆にご近所のごことは知りませんし、私の住む町のごこともよく知りません。馴染みもないのです。それより、少し離れた町を梯子して過ごしていますよ。向こう三軒両隣、ここから離れると、もう余所者に近いですよ。最近の町はね」

「まさか、内周とは、隣近所だけの範囲では」

「そうじゃありません。比較的近い場所と、遠い場所の違い程度です」

「それじゃ木村さんは、内周が好きではないと」

「はい、好みではありません。逆にくつろげませんし、安心も出来ません。それに私は帰属意識というのが嫌でしてねえ。べったりとそこで暮らしているのが何となく嫌なんです。地元の間人ぽいのも嫌です」

「それはどうしてですか」

「まあ、あまりいい目に遭わないからでしょうなあ。村八分じゃないですがね。敵が多いとか、嫌われ者だとかでもありませんが」

「じゃ、外周の方がくつろげるのですか」

二人はバス停にいる。

「このバスに乗れば、すぐに外周に出られます。電車に乗り換えれば、さらに遠くへね。だから、私が歩いている町内は家からバス停までの数十メートルぐらいですよ」

「じゃ、ご近所といっても、橋を渡るようなものですね」

「狭く短くですねえ。地元のことを知っているのは」

「それは、また風変わりだ」

「あなただって若い頃はそうでしょ。大きな町へ出ていたのではありませんか」

「そうですねえ、子供の頃は別にして、こんな狭苦しい町は嫌だと思ってました。だから、都心部に出ていましたよ。町内のことより、そっちの方が詳しくはほどです。しかし、今は地元暮らしの方が気楽で良いです」

「私は、まだまだ駄目ですなあ。最近の外周は都心部じゃなく、この町に近い町に出掛けています。まあ、こことそれほど変わらないのですがね。それでもその距離感がいいんです。その外周の町では私は余所者で、通行人です。この身分がいいのです」

「身分ですか」

「はい、外様です」

「ああ、外様大名のような」

「そうです。外周の町は、ここと変わらないとはいえ、さらにその向こうまで足を伸ばすことがあります。さすがに山の中に入り込むと、これはもう冒険ですがね。しかし、そこに埋まっているような村に出たときは感動しますよ。また来てもいいかなあ、と思います。次はいつになるかはしれませんがね。私だけが見つけた私の秘密の村って感じでね」

「それで、今日はどちらまで」

「まだ決めていませんが、とりあえず外周に出るこのバスで」

バスがやってきた。二人は乗った。

「あなたは終点の駅前に用事ですか」

「そうです。銀行なんかに寄ります」

「私は、その駅から適当なところへ向かいます」

二人の乗ったバスは駅前へと向かった。

了